

# Give Capitalism a Chance

～震災と「世直し」をめぐる考察と資本主義の可能性について～

Give Capitalism a Chance: The Relationship between Earthquake Disasters and the Mending of Society, and the Potential of Capitalism

古来、大震災は「世直し」と深い関係を持っていた。祖霊や怨霊の眠る大地が震え、津波や噴火がそれまでの人々の営為を灰燼に帰してしまう大地震は、現世を司る王やその政治が行き詰まっていることを現世の人々に知らせる事象でもあり、革命を誘うシグナル（天意の発顕）としても理解されてきた。

そのような人々の認識・世界把握の在り方について丸谷オーの『忠臣蔵とは何か』を引きながら、貞観震災、宝永震災、安政震災等を事例に考察を行う。

また、現代人もまた認識の古層にこのような因果関係を感じる回路を持っていることについて、村上春樹の短編『かえるくん、東京を救う』を引きながら考察を行う。

そのうえで、近代の事例として関東大震災と阪神・淡路大震災（以下、阪神大震災）、東日本大震災の類似性などを考察する。特に関東大震災について、それがロシア革命や第一次世界大戦後の世界秩序の再構成にあたった時期の震災であり、大戦景気のバブル、その破裂による社会的格差の拡大など、阪神大震災や東日本大震災を考えるうえで極めて類似性の高い社会背景の中での震災であったこと、その時点での民衆の悲願が『閥族打破、憲政擁護』というものであり、3つの震災に官僚支配打破という共通する人々の願いがあった事を析出する。

さらに、人々のもうひとつの願いである現体制（資本主義体制）の打破という願いについて、柄谷行人の「資本・ネーション・国家の三位一体体制」を絡め考察し、関東大震災後はそれが国家を軸とした方向に歴史展開したことを論じ、むしろ現在の＜帝国＞的現実の中では、世界市民的な連帯の萌芽もある中で、資本を軸としてこの三位一体体制を乗っ取り・飼いつづらしていく方向にこそ未来があることを示唆する。



Major earthquake disasters have had a strong relationship with the mending of society since ancient times. Major earthquakes shake the ground, where the spirits of ancestors and vengeful spirits rest, and cause tsunamis or volcanic eruptions that completely destroy people's lives. Major earthquakes, as natural events that have made people realize impasses reached by the country's rulers and their governance, have been considered to send a signal (Providence) that induces revolution.

Taking as examples the Jogan, Hiei, and Ansei earthquakes, this paper examines the role of such views and people's understanding of the world, referring to Saiichi Maruya's *Chushingura Towa Nanika* (What is Chushingura?). In addition, this paper discusses the fact that people today also have a latent ability to sense such a causal relationship, referring to Haruki Murakami's short story *Kaeru-Kun Tokyo Wo Sukuu* (Mr. Frog Saves Tokyo).

As examples for the modern era, similarities of the Great Kanto Earthquake to the Great Hanshin Earthquake and the Great East Japan Earthquake are considered. In particular, this paper discusses the following issues: that the Great Kanto Earthquake occurred when the world order was being restructured after the Russian Revolution and World War I; that, with a bubble resulting from wartime economic expansion and increased gaps among social classes caused by its burst, the social background at the time of the earthquake highly resembled that of the Great Hanshin Earthquake and the Great East Japan Earthquake; and that people back then desperately wanted to defeat the ruling class and support constitutional government. This shows that after each of the three earthquake disasters people had a common wish to break away from bureaucratic control.

Furthermore, considering a concept advocated by Kojin Karatani—a triune system of capital, "nation", and the state—in connection with the people's wish for change in the current (capitalist) system, this paper argues that the wish came to involve the state after the Great Kanto Earthquake and suggests that given today's "imperialistic" reality, in which a solidarity movement can spring up among global citizens, the future rests on capitalism-oriented actions to take over and "tame" the triune system.

## 1 | 序文として～響き続けるリフレイン

最初に、ここに掲げたGive Capitalism a chanceという表題で筆者が何を語りたいのかについて簡略に述べてみたいと思う。震災と「世直し」をめぐる考察と資本主義の可能性について、という副題はともかくとして、本題に掲げたこの英文は、さすがに遊びが過ぎているのかも知れず、この題を見ただけで不愉快だ、とばかり拙論には目もくれないという読者が現れるかも知れないし、それは筆者にとっても読者にとっても不幸な話ではないかと思うからだ。

で、とりあえずこの表題に込めた思いの吐露から始めてみたいと思うのだ。

とは言えこの表題は、1963年生まれになる筆者（おっさんじゃん）と同世代、もしくはもう10年くらい年長の方には、あるいはロックが自分自身の精神と切っても切り離せない根深さで生活に欠かせない文化として意識されている若い層にとっても、すでに本歌の察しがついている表題となるだろう。

そう、その察しの通り、この表題はジョン・レノンの代表作のひとつ、「平和を我等に」の原題、Give Peace a chanceをなぞって作られたものだ。ジョン・レノンは1960年代終盤、ベトナム戦争がまだ終わらず世界がなお冷戦の真ただ中であって混沌としていた時代に（あるいはそのような意味で均衡し実は安定し、たとえばわが国が高度経済成長の坂道を、まるで東洋大学の「山の神」柏原竜二<sup>1</sup>のように他の国にとっては驚異的な速度で駆け上っていた時代に）、All we are saying is Give Peace a chance、俺たちみんなが言っていることは平和に一度チャンスを与えてやってくれてことなんだ、とリフレインで繰り返すこの歌を投げかけてみせた。

東日本大震災とそれに付随して生じた福島での東電福島原子力発電所の事故は、われわれが戦後営々と築き上げたシステムのある種の不全を惨たらしいほど鮮やかに露呈して見せたり（あるいは現在でも進行形で露呈して見せているし）、その反省の中では恐らく、90年代の終

わりからゼロ年代にかけて叫ばれ続けていたグローバル化した資本主義体制や資本主義そのものに対するの懐疑や批判も、さまざまな立場から改めて投げかけられるのではないかと、と思う。

しかし、それでも筆者は、その懐疑や批判を地域通貨や地域通貨的なものを媒介としたアソシエーションのような在り方を構想することで「資本主義を超えていく」という議論や、グローバルに蠢動する資本主義を「国民国家的な権力の力で、あるいは慣習や確かな大地に根付いた共同体や共同体を凝集させる文化の力で牽制する」という議論に結びつけることには反対だ。

そうではなくてわれわれが考えるべきことは「もはや誰にも乗り越えられるような体制ではない」資本主義的な世界、「グローバルな規模で、かつまた複雑に絡み合った」資本主義的な世界、現実に聳え立つこの世界を否定し、新しい理想的な世界を「合理的に設計」してみせたり、堯瞬の世を懐かしむかのように過去を理想的な幻影として昔に戻ることを提唱したりするのではなく、むしろその現実を受け止め、資本主義の可能性を再検証し、この世界を人間の世界として解釈しなおすことではないだろうか。

そして、われわれは、その作業を通じてわれわれを「動物化」させる資本主義の運動に自覚的に抗い、「人間」としてむしろ機構そのもの、資本主義的世界そのものに乗っ取り、資本主義をく世界市民と共生し、より良い社会を形成していく駆動力・仕組みとして馴致<sup>じゅんち</sup>すること>にこそ挑戦するべきなのだと思う。

たとえば予想される資本主義的体制に対する批判のひとつには、利潤しか目的を持たない株式会社に原子力というようなプロメテウスの火の管理を委ねた瞬間に、安全性の基準も利潤確保のために甘くなり、結局「人災としてのフクシマ」を生んだ、というものが考えられる。

しかし今回の問題は利潤を原則として運動する資本主義機構の問題ではなく、むしろ「独占」がもたらす腐敗の問題であったり、行政との過度な結び付きがもたらす「緩み」の問題ではないか、と筆者は考える。なぜならば

健全な競争を前提にした株式会社の体制であれば、利潤確保のための大前提が堅固な安全性の確保になるはずだからだ。それは結局、「利潤の根本にあるものが信頼である」という資本主義的世界を貫通する法則に導かれている。

もちろん、短期的な利潤を株式会社の目的と置いた瞬間、そのような意味での倫理性は崩れる可能性はあるが、資金の出し手、株主がヴァンダービルド<sup>3</sup>のような強欲な個人であった世界はもうとうの昔に過ぎていく。今や基本的には株主とは年金基金を通じて株式会社を支配するわれわれ自身の別名なのであり、年金はその性格上、短期ではなく長期的な利潤の極大化をこそ志向する株主なので、信頼に裏付けられた長期的な利潤の創出の母胎としてこの世界の性格を規定する存在でもある。

だから、もっと原則的なことを言えば、強欲な株主・投資家という20世紀前半の紋切型の発想に拘泥する批判者にこそ現実認識を誤っているという意味での問題があるし、仮にそのような強欲な側面が（特に前衛に位置する機関投資家のサラリーマン・ファンドマネージャー達に）残っていたとするなら、問題はいかに株主・投資家の倫理観を市民社会の倫理観と同一のものにさせていくか、にこそあり、そのための働きかけや啓蒙が資本主義の打倒を叫ぶ前にわれわれが取り組むべき課題であるはずなのだ。

これは導かれた考察のほんのひとつの素描だが、東日本大震災とそれに付随した東京電力福島第一原子力発電所の事故や、このような災害に対し現在進行形ではあるもののそれに対応した人々の行動が示唆するもの、の中には、このような意味で示唆的な事象が多く見られた気がする。

限られた枚数ではあるものの、本稿の中で筆者はそのような事象の背後にあるもの、そのような事象がわれわれに示唆するものについて言及していきたいと考えている。

また、そのための下拵え<sup>こしらえ</sup>、適切な補助線を引いてみる作業、として、震災と「世直し」の相関のようなものも、

歴史や人々の心的構造の析出のような作業を通じて炙り出してみたい。枚数の関係もあるので例証を挙げた詳細な記載までには至らず、素描のようなものになるリスクはあるが、きっとそこには何か横たわっているという気がしている。

しかし、それはかつてイタリアの種馬と罵られた「当て馬」ボクサーだったロッキーが、世界チャンピオン・アポロに挑戦するくらいのとんでもない作業なのかも知れない。エイドリアンのために、そして自分のために、闘いを決意してトレーニングに励むロッキーの背後に、燦然とあの「ロッキーのテーマ」が鳴り続けたように、本稿を筆者が書く間、序文にお付き合い戴いた読者が「仕方ないなあ」と引き続き本稿を読む間、All we are saying is Give Capitalism a chanceというあのリフレインが「ロッキーのテーマ」の代わりに響き続ければ幸いだ。

## 2 | 世直し願望と大地震

### (1) 丸谷オー『忠臣蔵とは何か』 御霊信仰と世直し

表題がひねっていて、さらに第1章もひねっていて、さらに第2章が「世直し願望と大地震」かよ、と思われた方も多いだろう。しかし、世の中はいつでも急がば回れ、直線に行くことだけが、最短距離を駆け抜けることだけが、真実に到達する道ではない。少し違った角度から引いてみた補助線が、実は真実を突き止めるうえで決定的に有用だった、という場合もある訳で、とりあえず丸谷オーや村上春樹を語るところから論考を始めていきたい。

丸谷オーに『忠臣蔵とは何か』という極めて魅惑的な評論がある。この評論は赤穂浪士の復讐劇を忠義といった儒教的な徳目から読み解くのではなく、もっと原日本的な、あるいは原東アジア的な古層の認識、御霊信仰から読み解いたもので、そこで行われた吉良上野介殺害の「儀式」が、実は曾我兄弟の仇討なども踏まえたうえでの將軍殺しの意味合いも帯びていたと論じたものだ。

曾我兄弟といってもなかなかピンと来ないかも知れな

いが、これは鎌倉政権初期に富士の巻き狩りで曾我兄弟、五郎十郎が、父の仇である工藤祐経を討ち果たすという歌舞伎の世界では有名な物語になる。仇討の最中に兄である十郎（分かりにくいはこちらが兄）は逆に打たれて死に、生き残った五郎は頼朝の裁決で誅殺される。しかしポイントはこの事件の6年後に頼朝に不慮の死が訪れ、その後三代で頼朝の血縁が途絶え、源氏幕府としての鎌倉幕府が途絶えた点にある。丸谷は五郎はそのまま御霊につながり、祀り切れなかった曾我兄弟の怨念が頼朝の血脈を絶えさせた、と合理性よりはむしろ呪術性の中に精神的に埋没していた中世～近世の人々は考えたのだと言う。芸能というものはもちろんその源流は神や霊的なものとの交流にあり、歌舞伎や浄瑠璃の演目としての曾我兄弟に込められたものは、歌舞伎を通じた曾我兄弟の鎮魂でもあったと、さらに彼は論じる。

一方で、江戸時代は東国政権・武家政権としての鎌倉を強く意識した政治体制だったのは有名な話だ。司馬遼太郎を読んでも、他の作家を読んでも家康の愛読書が『吾妻鑑』であったのは歴史ファンであれば周知の事実でもあるだろう。

すると曾我兄弟は、同じ源氏政権としての徳川政権に対して、崇る神・荒ぶる神としての性格も持っていたはずだ、というのが丸谷の論考のひとつの柱となる。

御霊信仰で有名なのはなんといっても菅原道真だろう。栄達の道を閉ざされ都から大宰府に左遷され失意のうちに死んだ彼は怨霊となって、時には雷と化すほどの霊圧の巨大さをもって、彼を都から追いやった藤原北家の時平や時の帝、醍醐帝を呪い殺したと考えられ、恐れられた。

本当に呪いなどというものが存在するのかどうかは別にして、重要なのは当時の人々がそう感じ、道真の呪いとして一連の現象を理解したことだろう。無念を抱いて死んだ人間は、だからこそ「祀り」の対象、鎮魂の対象として残された人々、なかんずくその祟りを恐れるいわくつきの人々に認識されたのだ。逆に言えば、それは祀られる対象は呪詛する力も有する存在であることを意味

してもいる。

そこで丸谷が重視するのは、五代將軍綱吉治世の元禄期から宝永にかけて、江戸の四座が頻りに曾我兄弟をその演目としていた、という事実となる。特に綱吉が没する宝永六年（1709年）の正月には四座すべてが新春の演目に曾我兄弟を選んでいったという。符節という意味では、頼朝の死が曾我兄弟の死から六年後だったように、元禄の世の中に曾我兄弟の仇討を再現したかのような赤穂浪士の討ち入りは元禄十五年（1702年）、そしてその死は元禄十六年（1703年）と、まさに宝永六年の六年前となる。

丸谷はそのような事実を踏まえ、宝永六年正月に演じられた四座の曾我兄弟の芝居は、実は綱吉という王殺しを祈念した呪詛の儀式でもあり、その儀式は無念を抱いて死んだことで荒ぶる神となった主君浅野内匠頭の鎮魂の目的も持って吉良上野介を討ち果たし、そこで死を命じられたことによって（武士道的解釈とはまた別の意味で）自分たちもまた曾我兄弟同様、荒ぶる神として祀られるべき対象となった大石内蔵助以下、赤穂浪士たちが、新たなる霊威を加える事によって、実際に綱吉という王を呪殺する儀式となった（少なくとも当時の江戸市民にそのように暗黙に理解された）と述べる。

さらに彼は、忠臣蔵が綱吉逝去の年のまさに翌年、宝永七年から初めて歌舞伎の演目として登場することを指摘する。つまりそれは、霊験あらたかであった赤穂浪士の呪詛の力を恐れた江戸の人々が、赤穂浪士をもまた鎮魂の対象、祀るべき対象であったことを意識しており、その鎮魂目的も込められ急遽登場した演目だったという話だ。

さて、曾我兄弟はその後、1世紀近くにわたって正月歌舞伎の演目として登場するが、やがて新しい神であり、同時により鎮魂を必要とする赤穂浪士の忠臣蔵が、曾我兄弟を押して歌舞伎やその他芸能の主要演目としてその座に座りはじめ、そして今日に至る、とするのが、非常に粗くまとめた丸谷の論考となるだろう。

丸谷の論考の中で本稿にとって重要なのは、赤穂浪士

の仇討が時の将軍綱吉殺しを祈念する儀式、いわばある種の「世直し」として当時の江戸の人々に意識されていた、という部分となる。

綱吉はもちろん、今日のわれわれには「生類憐みの令」で有名な悪政の将軍というイメージが強く抱かれている。これは逆に忠臣蔵が歌舞伎から映画やテレビドラマにその形を変え何度も繰り返して語られてきたことから、悪政の印象強く刷り込まれている事象でもあるだろう。しかし重要なのは、そのように語り継がれてきたという事実であり、その長い治世の間、元禄文化の母胎となった繁栄も生んだはずなのに、あくまでもその死を願われる対象として意識されていたその理由は何か、という部分だろう。

合理精神に貫かれた（はずの）現代と異なり、丸谷も論ずるように当時の人々は御霊信仰に深く囚われているほど、前近代の思考様式の中に生きていた。そんな彼らが王に願うものは、何よりもその王としての超越的な力を通じた天との感応であり、そのコントロールであったと考えてもいいだろう。東洋と西洋と分けずとも、王が王である意味合いは、その徳で天を納めるという営為にこそ存在する。

そう考えた時、残念ながら綱吉治世は天変地異が続く治世だったと考えるほかない。「生類憐みの令」も逆にそのような自らの天を従わせる徳の欠如に真面目に悩む綱吉の人為として施行された法令だったという解釈も成立する可能性がある。

将軍となった年には東日本に洪水被害が起こり、米価が高騰。そこから3年間は連続して西日本も含め風水害が日本を襲い、飢饉や種痘が流行した。日光や会津で大地震も起きた。その後も風水害や疫病は綱吉について廻り、その極め付けが元禄16年（1704年）関東南部を襲ったM8.1、甚大な津波被害まで記録した元禄大地震であり、宝永4年（1707年）に起こったM8.4~8.7の東南海地震となる。特に後者は死者2万人以上、津波は関東から九州まで襲った大災害で、地震発生の49日後には宝永大噴火と呼称される富士山の噴火（江戸まで火山灰

が降り注いだ）まで記録されている。

後で触れる『虚構の時代の果て』で大澤真幸も指摘しているが、近代は都市計画のもと前近代では必ずしも「隠されたもの」ではなかった死を日常から切り離れた。死者を埋葬しそこに還す大地もまた明らかに「あの世＝人知の及ばぬ神の領域」として前近代では意識されていた（たとえば財宝を地中に埋める行為や現代にも残る地鎮祭等がその例証になるだろう）が、近代はその大地をたとえば舗装道路で覆い隠した。しかし巨大地震は現代に住むわれわれにさえ、実は大地が人知の及ばぬ神の領域のものであるという事実を時に思い起させる。

その大地が震える、前近代の人々がそこに大きな恐れ of 感情を持っていたとしても全く不思議ではないだろう。怖いものという比喩に「地震、雷、火事、親父」があるが、その筆頭が地震であるのも、それが死者を還す大地、死者たち・祖霊たちが折り重なって層となっているその大地が、怒り震えているという、あるいはもっと根源的で靈威、神威の高い（普段は眠りにについている）「もの」が溜め込んだ怒りに震えて暴れているという恐れが非常に強いものだったことを示しているだろう。

そして、だからこそそれは「世直し」のシグナルでもあり、逆にそのような形で暴れる荒ぶる神を鎮める必要性をその当時を生きた人々に感じさせた現象でもあった。つまり大地震は現在のこの世界の何かがおかしいと世界の運行を司る人知を超えた何か（あるいはその世界の運行を人の世界で司る王に呪詛の感情を持つ怨霊が）怒りに震え引き起こす現象と考えられていたのだ。

## （2）貞観震災と安政東南海地震 革命のシグナルとしての震災

今回の東日本大震災によって逆に有名になったのが、その遠い先例であった869年の貞観震災だが、貞観期もまた相次ぐ地震や疫病の流行等に悩まされた時期だったという。

864年には富士山の噴火、865年には阿蘇の噴火が続く、歴史上の事件としては866年に応天門の変があり、摂関政治が始まるとういうまさにその体制変革の季節だ

った。相次ぐ天災に対して時の権力もまた御霊を鎮めるための御霊会を神泉苑<sup>3</sup>で開始したのもこの頃だが、貞観震災とそれに続く余震は東北から遠く離れた京都の民衆にも脅威を与え、民衆からの御霊の鎮魂の動きが、今日まで続く祇園祭の奔りとされている。

また、少し角度を変えてみれば、ちょうどこの頃、弘仁貞観文化としても有名な空海・最澄の真言宗、天台宗が興隆したことも、荒ぶる神を鎮魂するまた別の手法や思想を当時の人々が希求していたことを証明している。

いずれにせよ、圧倒的な規模の地震は、「世直し」の必要性をその時代、その世界に生きる人々に警鐘のように死者たちの眠る大地（あの世）から響き渡らせる霊象としても理解されてきたのだ。王が天と交流し平穏な日常を実現させる機能を有するとすれば、まさにその天が大地震や火山の噴火のような目に見え、肌を感じる災害で警鐘を鳴らすとき、それは天が革命を誘うシグナルとしても前近代の人々、古代・中世の人々に理解されていたのだ。

綱吉の死後、宝永震災に次ぐ大地震が安政に起きた。1854年12月23日に発生したM8.4の安政東海地震と翌12月24日に同じマグニチュードで発生した安政南海地震である。安政東海地震が引き起こした津波は実に房総半島から四国までの太平洋の海岸線を襲い、甚大な被害を与えた。道後温泉の温泉湧出は地震後数ヵ月止まった。死者は3万人を超えたと推察されている。

安政年間と言えば、ペリーが来航し幕末動乱の始まるまさにそのタイミングであり、その年の初めに日米和親条約が締結されている。世情騒然とする中での震災と津波、そしてそれに続いた余震は、やはり「世直し」の必要性という感覚を当時の人々に強く与えたことだろう。大地震を誘う「もの」を想像上で具象化したひとつの表れが鯨絵ということになるが、鯨絵が当時、大流行したこともそのような感覚を推察させる事象だろう。

1855年には江戸にも大地震が襲い、直後、堀田正睦が老中首座になった。1858年には一橋派と紀伊派の抗争の末に家茂が将軍となり、井伊大老のもとで安政の大

獄、その巻き返しとしての桜田門外の変と歴史は続いていく。体制は揺り動かされ、その流れは明治維新へと続いていく。その中で、正史には表れにくい、攘夷があれほど高く叫ばれた心的構造のどこかに、大地が揺れ動き震えたことを、祖霊の怒りとして理解する構造が働いた可能性を否定するのも難しいだろう。それは、一方では鎮魂を促すものでもあり、革命を促すものでもある。いずれにせよ、何かが（安政においては鯨として理解された「もの」が）、「世直し」を、変革を、その身を震わせて希求しているのだ。

### （3）村上春樹『かえるくん、東京を救う』 <響きやふるえ>について

ところで、鯨絵という話が出たところで、村上春樹が阪神大震災後に発表した『神の子供たちはみな踊る』の中の作品『かえるくん、東京を救う』について触れていきたい。

村上春樹が同じ1995年に起きた阪神大震災とオウム真理教による一連のサリン事件に深く揺さぶられたという話は有名な話だ。ユングの集合無意識という概念に深く魅せられる村上からすれば、この2つの事象はそれぞれが独立した事象ではなく、深く人々の集合的な無意識に関わる話であり、事象でもあるととらえられたのだろう。オウム真理教のサリン散布による無差別殺人もその舞台は地下鉄・アンダーグラウンドであり、そこには暗喩的に共通するものが横たわって見ええする。

阪神大震災とオウムの影はその後の彼の作品世界に常に現れていて、近作である『1Q84』にも麻原彰晃を彷彿とさせる教祖やオウムを連想させる教団が描かれているほどだ。また、世界の悪意を代表するかのようなりトル・ピープルは、前近代の人々が恐れた御霊のような存在を現代に継承している側面すらある。

『神の子供たちはみな踊る』は、そのような村上の変貌を受けた最初の作品集でもある。阪神大震災をモチーフとした連作であるこの作品集には独特の色合いが感じられるが、『かえるくん、東京を救う』は、もっとも直接に阪神大震災が村上に与えた影響や、阪神大震災について

村上が何を感じたのか、を示した作品となっている。

### ①「かえるくん、東京を救う」

この作品の舞台は東京、阪神大震災から1ヵ月後、1995年2月の東京になる。ある日、東京安全信用金庫、融資管理課の片桐が自分の安アパートに戻ると、部屋には身長2メートルの蛙が彼の帰りを待っていた。物語はそこから始まる。

蛙は3日後に阪神大震災を超える巨大地震が東京を襲う、それを阻止するために片桐に自分と一緒に地震を起こそうとしている「みみず」と闘って欲しい、と告げる。それは山手線の車両ほどもある巨大な「みみず」で、普段は何十年も眠っているけれど「遠くからやってくる響きやふるえを身体に感じとり」（新潮文庫『神の子供たちはみな踊る』p.161）それが憎しみに置き換えられると、腹を立て地震を起こすというのだ。蛙はその地震がもたらす壊滅的な被害を防ぐために、片桐とともに「みみず」と闘おうとしていると告げる。

新宿歌舞伎町という場所で、焦げ付いた融資の回収業務という陽のあたらない、しかも危険に満ちた業務を誠実に入行以来16年こなししてきた片桐は、早くに両親を亡くした後、弟と妹を大学に進学させ結婚までさせた。しかし、背も高くなく風采もあがらず弁も立たない片桐はバブル経済の中、はなばなしい融資実績をあげる同僚を横目に、彼らの失態を処理する融資回収に従事したため会社でも評価されてはいない。タフな交渉を求められるその業務で黒社会の中で肝の据わった男として評価されてはいるが、正統に評価されてはいない。しかも彼を感謝してしかるべき弟も妹も彼を見下して、40歳にもなったのに安アパートで友達も彼女もいず「運動神経もゼロで、音痴で、ちびで、包茎で、近眼です。乱視だって入っています。ひどい人生です。（中略）何のために生きているのか、その理由もよく分からない」（同書p.171）そんな男として描写される。

いくつかのやりとりとひとつの事件（蛙が、自分が実在であることを証明するため片桐が嵌まり込んでいた危険な案件を処理して見せた）の後、片桐はなぜ平凡な

（あるいは平凡以下の何のために生きているのかさえ自分で分からない）自分が、空手の達人でも自衛隊員でもなく「みみず」と闘うパートナーでなければならないのか、と蛙に問い質す。「正直に申し上げまして、あなたはあまり風采があがりません。弁も立たない。だからまわりから軽く見られてしまうところもあります。でもぼくにはよくわかります。あなたは筋道のとった、勇気のある方です。東京広しといえども、ともに闘う相手として、あなたくらい信用できる人はいません」（同書p.164）と最初の訪問時から片桐を評していた蛙は、その片桐の問いに答える、神妙な声で。

「あなたのような人にしか東京は救えないのです。そしてあなたのような人のためにぼくは東京を救おうとしているのです」（同書p.171）と。

この後、片桐は蛙と一緒に「みみず」と闘うことを決意するが、おそらくは蛙が処理したと考えていた事案に絡んで、その決戦（予定された地震の前日）の前に歌舞伎町で撃たれてしまう。しかし、片桐が翌朝目覚めると予定された地震は起きてはおらず、撃たれた傷もない（なぜか意識を失って倒れていたのだ、と看護婦は片桐に伝えた）。そして、その夜、闘いに疲れ消耗しきった蛙から、片桐は想像の世界で蛙とともに「みみず」と闘ったこと（精神的に蛙の傍にいて蛙を応援すること、闇に抗する光を、踏込式発電機を使って供給すること、が片桐の闘いにおける役割だった）を蛙から聞かされる。

しかし、蛙も片桐も結局「みみず」を打ち破ることはできず、とりあえず今回の震災を起こさないように「引き分け」に持ち込むことしかできなかったのだ、と蛙は片桐に伝える。そして、疲れ果てた蛙は眠りに落ち、結局は忍び寄り闇にその体を破壊され消えてしまう。蛙を消した「もの」はベッドに横たわる片桐にも迫るが、そこで看護婦の声で悪夢は覚め、安らぎのなかで再び夢のない眠りに片桐は落ちていく。

実際には本編を当たってもらえないが、これが『かえるくん、東京を救う』のあらすじになる。「みみず」と鯨の違いこそあれ、村上の想像が江戸の人々の想像と

同じ位相にあることは明白だろう。もちろん、それは村上が古来から伝わる伝承を踏まえているということだろうが、重要なのはそのような伝承や想像がそのまま現代を生きるもっとも優れた表現者の世界を構成するという事実だ。

## ②<響きやふるえ>

鯨がなぜ騒ぐのか、について安政年間の江戸の人々も、綱吉の宝永年間の江戸の人々もそれが地表の世界の歪み、不正義、それを感じる人々の一つひとつは小さいけれども怒りゆえだと感じていた。同じことが村上の世界でも表現されている。この作品での「みみず」は長い眠りで脳みそが溶けている主体なき存在として描かれている。その「みみず」を揺り動かすのは、「遠くからやってくる響きやふるえ」であり、それは人々の響きやふるえに他ならない。

もちろん、現代を生きるわれわれは地震がなぜ起きるのか、についての一定の科学的知見を持っている。細かな部分、精緻な部分は専門家の領域ではあるものの（それが高度に分業化された現代の在り方なのだ）、プレートの上に浮かぶ世界のイメージをわれわれは十分理解している。しかし、合理性という光に照射された現代人、近代人としてのみわれわれは存在する訳ではない。地層がジュラ紀やさまざまな記憶をそこに保存するように、21世紀を生きるわれわれも合理性を重んじる？ 現代人という地表の裏側に、近代の層、前近代の層、中世の層、古代の層をその世界理解の方法に抱えて存在しているのではないだろうか。

その重なった地層が導く世界理解が、現象をただ単なる現象として科学的に理解するだけではわれわれを満足はさせず、現象を引き起こす「因果関係」へと思考を誘う回路となる。東日本大震災が起きてすぐに石原慎太郎・東京都知事が「天罰」という比喻を用いたけれど、そのような意味で因果関係を感じて、世界・現象をそう解釈しようとした人々はやはり多かったのではないだろうか。

逆に重要なのは、因果関係の立証ではない。重要な

は、事象を因果律で把握しようという認識の構造が現代を生きるわれわれにも存在するという事実なのだ。また、今回のようなとてつもない震災について、むしろそれを「世直し」と結びつけて把握しよう、震災をして歴史の画期しようと思えるわれわれの心的構造なのだ。

東日本大震災とその震災が津波を引き連れて破壊した福島原子力発電所のチェルノブイリを超える事故に、正直なところ、われわれの多くは何かしらの「天意」を感じている。それは合理性を離れた部分での真実であるだろう。「世直し」をわれわれは求めている。では、われわれはこの世界の何を変えたいと願っているのだろうか。この世界のシステムの何が問題なのだ、と感じているのだろうか。そのことについて、章を改め、考えてみよう。

## 3 | システムの何が問題なのか～関東大震災、阪神大震災との比較を踏まえて

前章では大地震と「世直し」の相関のようなものを取り上げてみた。この章では、一步踏み込んで、われわれがこの震災と震災が引き起こしたフクシマの問題で、何を「天意」として読み取ろうとしているのか、このシステムの何が問題だと考えているのか、そこを明確にしてみたいと思う。

しかしまずは、ここでも寄り道をしてみたいと思う。何度も言うが合目的な最短に行く思考にのみ栄光があるのではない。人生の価値が勝ち得られた社会的地位に存在するのではなく、そこに至る（あるいは至れはしなかったにせよ）プロセスにこそ存在するように、このような論考においても廻り道に見える思考の過程に何か（あるいは神が）宿る可能性も否定できはしないだろう。そこで、考察するのは、近代以降における震災がどのような「世直し」の文脈の中で発生した事象だったかの検証だ。

前章で取り上げた安政大地震は、それでもまだ江戸という前近代の世界での災害だった。そこには武士がいて、ちよんまげ丁髷を結い二刀を腰に下げており、溶け合っていたけれど、それでも明確な士農工商という制度の世界が（われわれがたぶん実感はできないまた別の世界が）展開し



ていた。だからそれは残念ながら古層に含まれる世界認識の方法が色濃い中で事象だったと整理すべきだろう。という意味では、今回の震災との類似性を検証すべき対象となる大地震は、1923年9月1日に起きた関東大震災と、1995年1月17日に起きた阪神大震災になる。もちろん、厳密に言えば、1946年に起きた南海地震もちょうど敗戦を跨いで地震であり、世界の再生、世界の変貌を人々に誘う地震だったと考える方向もあるとは思いますが、そこまで思考を古層に寄り添わせるのも危険な感覚があり、とりあえずこの地震は考察から外して考えてみたい。

### (1) 関東大震災とそこで呪われていたもの、祈られていたもの

最初に関東大震災について考えていこう。

関東大震災は、大正12年（1923年）9月1日正午2分前に神奈川県、相模湾北西部を震源として発生したM7.9の大地震で、10万人を超える死者・行方不明者を出した歴史的な震災である。東京は太平洋戦争後、高度経済成長によって類を見ない巨大都市として発展した訳だが、この時代においても江戸の繁栄を引きずり、近代国民国家の政治首都としてやはり圧倒的な都会であり、関東大震災は、その東京から80キロしか離れていない相模湾を震源としていたことで、ほぼ家屋が全壊したとされる小田原以東の地域、横浜、川崎、そして東京に甚大な被害を与えてみせた。

また、よく知られているように正午前の炊事の時間帯だったことから、下町を中心に各地から火の手があがり、それは江戸をそのまま引き継いだ街を容赦なく呑み込んだ。避難民が数十万人単位で上野公園や日比谷公園、靖国神社等になだれ込み、ちょうど、1週間前に時の首相、加藤友三郎が逝去したことを受け、大命降下された山本権兵衛がなお組閣中だったこともあって、政府はとりあえずの無政府的な状況を憂慮し戒厳令を施行、警察ではなく軍隊が朝鮮人への暴行等も発生した治安の悪化を（大杉栄惨殺等、別の意味での暴力はあったにせよ）収束させたという。

関東大震災というとわれわれは読書体験としての『帝都物語』（荒俣宏）を持っているので、また古層の認識にはなるけれど、登場人物の魔人・加藤保憲が龍脈を使い平将門の霊威を借りて顕在化させた震災というような「物語」を連想するが、実際に起きたその震災は、マグニチュードの数字はともかくとして、まさに首都、帝都を狙い打った地震として、膨大な死者を発生させ、都市を破壊し尽くして見せた。直接の死者という意味では、その後の阪神大震災や今回の東日本大震災を遥かに上回る史上最大の震災だったと言える。

それでは、この震災が何を呪詛されて・どのような「世直し」を期待されて起きた震災だったのかを考えていこう。

その意味ではこの地震が起きた1923年という年号は興味深い。

1867年の明治維新から半世紀を経て、日本は日清、日露の勝利で一等国としての地位を確立した。明治維新のスローガンが富国強兵であり、維新を主導した指導者たちの悲願が、有史以来地政学的な意味で常にわが国が意識せざるを得なかった隣国、当時であれば清、という大帝国すら蹂躪した西欧列国に対し、なんとか国家としての不羈独立を果たす、というものであったとするなら、その目的は清を圧倒し、さらにはロシアに伍し、極東の戦闘においてロシアを屈服させたことで実現したと考えられた。またさらには天佑のように第一次世界大戦が1914年から1918年の4年にわたって欧州を戦火に巻き込み、日本はその産業構成を軽工業から重化学工業に、より先進的な構造にと変貌させることに成功。国力を疲弊させた独仏の大陸2国を凌いで、英米と並び、世界の三大強国として国際的にも認知された。それが1920年代初頭の日本の位置となる。

明治はすでに過ぎ去り、明治天皇も伊藤博文も鬼籍に入っており、伊藤を継承し、彼が理想とした地に足の着いた良識ある政党勢力を基盤とする政党政治を一度は実現した原敬も、維新以来、伊藤の良き政敵でありかつその現実的・実務的な判断能力から元老として国家を良く

育成した山県有朋も、伊藤や山県に明治14年政変で追われ、在野にあって伊藤とはまた別の意味での政党政治の実現をその終生のテーマとして、その最晩年には第一次大戦時の首相として国力盛運のこれ以上はない絶頂を経験した大隈重信も、原が1921年東京駅で刺殺された後、山県、大隈はその後を追うように1922年（まさに大震災の前年）、カリスマ的な巨人としての個人はみなこの世を去っていた。

さらに1917年にはロシア革命があり、世界史の構造もまた大きく揺らいでいた。1919年のパリ講和会議、ベルサイユ条約、国際連盟の創設、そして1921年にはワシントンで軍縮会議があり、その一連の動きの中で、日本と英国は日英同盟を発展的に解消している。

また、第一次大戦の大戦景気は、平成のバブル景気に似て、IT成金ならぬとえば船成金や相場の成功を背景にした成金等を生み出していた。軽工業から重化学工業への産業構造の変化の中で、都市はその吸引力を強め、農村から人口を吸収した。それが大戦後の反動で不景気が来ると、景気の反転とともに都会での職はなくなり、失業問題や格差の問題が大きな社会問題となっていった。

世界的な枠組みの大きな変動、バブル、そして格差、失業、関東大震災と阪神大震災・東日本大震災のアナロジーはこのような部分にも存在する。1995年の阪神大震災との類似で言えば、1917年のロシア革命と1923年の関東大震災と、1989年のベルリンの壁崩壊、1991年のソ連崩壊から1995年の阪神大震災、と時間的な流れにも類似性が感じられる。

明治維新からほぼ半世紀、維新の目的・目標は一定程度果たされ、国家もしくは国家と微妙に重なり合っている日本社会の目標は喪失しつつあり、国際的な枠組み、つまりは世界史それ自体が変革の時期を迎えていた。

これが1923年の素描だが、本論の趣旨に沿って「世直し」という文脈で考えるならば、もう少し深く掘り下げた社会の無意識のようなものを、その時代の求めている空気を考察する必要があるだろう。

そこで考えてみるべきなのは、逆にこの関東大震災を

経て何を人々が獲得したのか、ということになるし、為政者の側が何を牽制しようとしたか、を見つめるという作業になるだろう。するとそこから導かれるのは山本内閣から清浦内閣、そして第二次護憲運動と続く一連の歴史過程の中で、加藤内閣で達成された普通選挙制度の導入と支配勢力が一方で同時に施行した治安維持法の成立ということになる。

## (2)『閥族打破』の叫び、山県が恐れていたもの

明治維新というのは西欧近代の理解と導入という側面をどうしても持っていた訳だし、その精神の理解の中で、天皇を中心とした国民国家の創生・育成というものが維新を支え国家官僚となった維新の志士たちの大きなテーマとなった。その一方で自由や民主主義という西欧の価値に対する理解も、同時に進み、自由民権運動や国会開設の運動、そして国会開設後は政党政治即ち憲政の実現というものが、歴史の底流をなす清冽な地下水のような大きな流れで明治・大正を貫いていったと考えていだろう。そしてその流れは教育の普及や経済の成長・成熟等を背景に一部の先覚者の運動から、より多くの人々を巻き込んだ運動へと成長していった。

むしろ伊藤ではなく山県から歴史を見た場合に、この湧き上がっていく国民のエネルギーの大きさ、がよく見えてくる。明治維新は土農工商という封建的な制度を葬り去ったが、現実的な力である暴力の領域で言えば、近代的な兵器、近代的な戦術を前提にすれば、武士の軍団より、おかれた立場は卑しくても軽装で近代的な銃器を装備し、機動力に富む奇兵隊が武士の軍団を圧倒することになる。山県は第二次長州戦争でその事実を体験し、徴兵制度導入の主導者となって国民軍としての陸軍を育てていく。そしてその陸軍は西郷を擁する武士たちをも西南戦争で圧倒する。

国民国家とはある意味で国家が大衆を総動員することに成功した国家でもあるが、自身が大衆を動員することがどれだけ巨大な力を生み出すかを知っていたからこそ山県は、政党政治に理解を示す伊藤とは異なり、あくまでも大久保流の有司専制にこだわり、大衆の力を解放す

ることでやっと作り上げた極東の国民国家の国体が崩壊することを恐れたのだ。

やがて伊藤が政党に軸足を移す中で、薩長閥が「官僚閥」として山県を中心に結束していくのは、もちろん「政治家・実務家」としての山県個人の能力の傑出という部分もあるが、山県の抱いた大衆への恐怖の感覚が官僚を結束させる触媒として有効に機能したからでもあるだろう。

伊藤や山県が第一線で首相として国政をリードした時代が終わり、日露戦争前後には桂太郎と西園寺公望、原敬の時代、桂園時代が訪れるが、伊藤における原のような役廻りを担えたであろう桂が早逝すると、結局は山県が院政のような感覚で藩閥を受け継ぐ官僚勢力を代表し、元老指名のシステムを巧く使いながら超然的な官僚内閣を、政党勢力を代表する政友会の原と牽制をしながら、その時々首班を変えながら組織することになる。

このような山県を頂点とする超然的な官僚内閣の打倒こそが、この時期の人々の悲願となった。

大正デモクラシーとして、あるいは第一次護憲運動、第二次護憲運動として知られる一連の運動とともに民衆の大きなうねりは、一方ではロシア革命まで視野に入れ労働者の資本に対する運動としてこの時期各社で頻発したストライキや、1918年にはより生活に密着した米騒動のような形で沸き上がっていく。そして、意識ある人々が口ぐちに標榜したスローガンが『閥族打破、憲政擁護』というものだったことは記憶している。

関東大震災後、震災で壊滅的被害を蒙った帝都復興を主導した後藤新平等で有名な第二次山本内閣は、虎の門での難波大助による摂政狙撃事件やギロチン社などが企図したテロ未遂事件の責任を取ってわずか4ヵ月で倒れることになる。

このような流動性の高い政治・社会状況の中でたとえば日本資本主義の父とも目される渋沢栄一は「天譴論(てんけんろん)」、関東大震災は大戦景気で贅沢に流れた日本国民、不正事件が横行し危険思想が広まりやすくなった日本への天の戒め、というような議論を説いた。こ

の辺にも阪神大震災・東日本大震災との類似性が感じられるし、前章で述べたわれわれの持つ心的構造がここでも証明されている。渋沢がここで述べている不正事件には、この10年前にやはり第一次山本内閣を襲ったシーメンス事件などの疑獄・汚職事件がその念頭に置かれている事にも触れておくべきだろう。また、摂政狙撃事件やギロチン社の事件は、阪神大震災後に起きたオウム真理教の地下鉄サリン事件を連想させる。

国力が増し、自信を持った民衆は政治参加を激しく希求したし、軍閥や藩閥が私益のために国家権力に寄生する状況を激しく糾弾した。また、経済構造の近代化は明治維新时期においては国民として大きくくくることのできた集団に格差を生じさせ、その格差が体制=システムそのものの是正をそれぞれの立場から企図する運動を刺激した。『藩閥打破、憲政擁護』のスローガンはそのすべての勢力を包摂するスローガンとしてとりあえずは機能し、その声が「響きやふるえ」となったかのようなタイミングで、関東大震災が発生し、結果として普通選挙制度は実施され、一方では治安維持法が施行された、それがとりあえずの関東大震災をめぐる整理となる。

### (3) 『閥族打破』と『官僚支配打破』 関東大震災と阪神大震災、東日本大震災の類似性

この後の歴史について簡単に触れれば、普通選挙制度はやがて大政翼賛会的な政治状況を生み出していく母胎として機能したし、治安維持法は当時先端の危険思想であった共産主義勢力を弾圧していった。

資本主義はその本家であるアメリカで1929年の「暗黒の木曜日」を契機に、自己崩壊のような状態に陥ったこともあり、資本主義を超える思想が模索され、それがドイツではナチズム、日本においては京都学派が標榜した例の「近代の超克」議論とその思想や満州独立を独特の史的構想で主導した石原莞爾の思想等を背骨に据えた大東亜共栄圏思想に結実していくことになる。

これは一方では、停滞感の中で格差に悩む多くの国民が、軍部の提示した満州や中国、東南アジアというこれからの世界、新世界に自らの可能性を賭けてみたいと願

う心性にも支えられていたのだろう。ワシントン会議前夜まではその飽くなき予算請求に批判的な国民もいた日本で、軍部が台頭する心的な背景には、関東大震災で無秩序状態に陥った東京で秩序形成のため戒厳令をその行動の法的根拠として鮮やかに立ち働いた軍の姿が、被災に遭遇した民衆に非常に頼もしく見えたであろうことも指摘しておきたい。歴史家の今井清一はこう書く。

「騎兵の馬蹄のひびきは、恐怖と不安にみちた人びとに活気をよみがえらせた。男も女も老人も子供も、これをよろこび迎えた。大正デモクラシーのなかで軍閥と非難され、無用の長物として軍縮を要求されていた軍隊は、震災によって活動舞台を与えられ、国民のあいだに権威と親近感をうちたてるチャンスをつかんだのである」(中公文庫『日本の歴史 大正デモクラシー』今井清一 p.387)

後述するように東日本大震災の後、迷走しそのあまりの頼りなさを糾弾された政府や、あまりにも無責任かつ無能な対応を繰り返した東京電力の経営陣に比べ、自衛隊の献身、自衛隊の活動は被災地の人々やその活動を伝えるメディアを通じて日本国民全体の自衛隊観をまさに感情の部分で、あるいは無意識の領域で頼もしい存在として認知させたが、それもまた関東大震災との類似性という観点で、この段階で指摘しておくべき事項になると思う。

さて、関東大震災前後に『藩閥打破、憲政擁護』と叫ばれたスローガンと同様のスローガンを阪神大震災や東日本大震災前後で探るのであれば、すぐに『官僚支配打破』というスローガンが浮かぶだろう。阪神大震災前後の世界ではそこに『自民党打破』というスローガンも付せられていたが。

関東大震災前の藩閥というのも実態はすでに単なる長州閥ではなく山県系官僚閥という色合いを濃くしていた訳なので、実は関東大震災前に叫ばれた『藩閥打破』の叫びは、そのまま『官僚支配打破』という現代のスローガンと重なるスローガンとして理解することが可能だろう。

つまりそこで<響きとしてふるえ>として人々に呪詛されているものは、官僚であり官僚が象徴する自分たち民の外側にある支配するものとしての国家、超然的にそこに佇む国家そのものであると考えることが可能だろう。それは、自分たちのものではなく、自分たちを阻害し、支配する重苦しい現実なのだ。国家そのものを自分たちのものとして取り戻そうという祈り、もしくは国家そのものを否定したいという願望、実はそのようなものが『藩閥打破』『官僚支配打破』というスローガンには透けて見えている。

#### (4) 阪神大震災とオウム真理教 国家を取り戻したいという願いと否定したいという思い

もちろん、国家を自分たちのものとして取り戻したい、という願いと、国家そのものを否定したい、という願いの持つベクトルは同じものではないし、分化されていない混沌の段階ではなく自覚的に自分の政治的な立場を選択した人々にとっては、そこには明らかに別の党派の形成につながる思想の違いがある。関東大震災の時代には、護憲運動の担い手として立ち働く人々とアナーキズムに身を任せある種の浪漫に殉じていった人々との差という形でそれは顕れていった。同じことが、自民党支配を打破しようとして動いていた人々と、オウム真理教の信者もしくはオウムのものに惹かれていた人々の間に阪神大震災の頃には存在していた。

阪神大震災とオウムの地下鉄サリン事件について社会学者の大澤真幸はその著書『虚構の時代の果て』で、それは1995年に闘われた2つの戦争だった、と記したが、特にオウムの闘争は時の国家公安委員長だった野中広務が明確にこれは戦争だと意識していたように、明らかにオウムという想像の国家が国民国家としての日本に挑んだ戦争、国家そのものを否定しようという戦争に違いなかった。

そのような世界に対する否定は、日本という国家を超えた段階でもすでに存在している。太平洋戦争が終わり、闘われることのなかった戦争、あるいは蛙と「みみず」が闘ったように想像の世界で闘われた戦争だった<冷

戦後も終わった世界は、加速的にアントニオ・ネグリ、マイケル・ハートの言うような「帝国」として新しい権力の形態を現出しつつある。それはアメリカという国民国家が政治的に作り出した世界と言うよりも、アメリカという国家とはまた微妙に位相のずれた何かを作り出した世界であって、そこに日本もイギリスもドイツもフランスも呑み込まれて坩堝の中で混沌となったそんな世界がある。

そのような世界の表象としてたとえば世界貿易センタービルが2001年9月11日のニューヨーク・マンハッタンに存在して、アルカイダというこれもまた国家を超えた組織がそのビルを航空機テロで破壊して見せた。

アルカイダは敵を明確化するという目的においてワシントンのペンタゴンも標的にしたことによって、アメリカという国家がその敵として認識され、逆にアメリカという国家もまたアルカイダを国家の敵として戦争を闘うという話にはなったが、このような事象もまた東日本大震災が何を換えようとしているのか、を考えるうえでは重要な伏線・補助線となるだろう。

次に阪神大震災について考えてみよう。

阪神大震災が発生した時期の国民の願いは『官僚支配打破、自民党支配打破』だった、と述べたが、誰しもが理解している通り、阪神大震災が起きた時期、日本の首相は社会党の村山富市であり、時代は55年体制が盤石であれば誰も信じられなかっただろう組み合わせ、自民・社会、そしてさきがけの連立政権が内閣を組織していた。もちろん、これはある種の仇花であり、実際にはその政権は革命政権としての日本新党以下共産党を除く野党勢力が、小沢一郎の剛腕によって連立した政権の内部分裂によって成立した政権だった。

1945年の敗戦から1995年の阪神大震災までの50年間に、明治維新においても半世紀の間に日本が富国強兵・不羈独立と掲げた国家目標を実現したように、戦後日本も自らが掲げた経済大国の夢を十二分に日本は実現した。この間に、経済成長を実現していった国家と資本の結合、「政・官・財の鉄のトライアングル」と呼ばれる

構造は、腐敗の温床としても捉えられるようになっていった。大正期にシーメンス事件があったように昭和にはロッキード事件があり、それは氷山の一角で、さまざまな分野でこのような競争ではないもたれ合いが生まれているという認識が人々の間に浸透していった。

バブル経済が弾け、停滞の感覚が日本を覆っていたことも、関東大震災の時期同様、国際社会の枠組みの変化に、これまでの体制で適応することは難しいと暗黙の裡に国民が感じていたことも阪神大震災前夜の空気として記す必要があるだろう。

平成5年（1993年）、容易に突き崩すことはできない、と思われた自民党支配の体制が崩れ、日本新党の細川首相が誕生した際の高揚を覚えている人も多いだろう。それが、佐川急便疑惑などの問題や国民福祉税の問題もあって、細川が政権を中途半端に投げ出す形で短命で終わると、反動のような形で自社さきがけの村山連立政権が誕生する。

世界的な意味でも資本と労働の共生が資本増殖を加速させる、という意味でのフォーディズムの限界が早くも1970年代以降叫ばれた中で、自民党と社会党の連立政権というのは資本も労働もすべてが融解し合った新しい資本増殖過程の誕生を政治的にも意味するような事象だった。

明確に提示された構造が溶解し、誰が敵なのかが分からないという感覚に支配される中で、とにかくまずは変革を、そのためにはまず官僚支配を打破したい、そのような願いは阪神大震災後も、底流のように国民感情を支配していく。

阪神大震災の対応の悪さに対する批判もあって、村山政権は、結局は橋本政権・自民政権にと移り変わり、そのまま小淵、森へと権力は委譲されたが、次に登場した小泉純一郎の圧倒的な国民人気を支えたものは、自民党にいながら「自民党をぶっ壊す」と叫んだ改革者としての小泉に対する国民的期待だったと考えることができるだろう。そして実際、この過程の中でも、かつて揺らぐことはないと思われた盤石の自民党は弱体化を続けて

いく。

混乱や混沌の中で、それでもさまざまな経緯を辿って一方の政治勢力としての民主党が誕生した事は、弱小政党の連立という形ではなく、少なくとも形式的にはひとつの党が自民党のオルタナティブとして存在するという状況を生んだので、それが「何かを変えてくれ、少なくとも官僚支配の体制を変えてくれ」という国民の〈響きやふるえ〉を票に変えることで誕生した政権、それが平成21年（2009年）8月に誕生した鳩山内閣だった。

#### （5）もっと深い場所で

そのように考えれば、東日本大震災を招来させたものは、期待を裏切られたという〈響きやふるえ〉の大きさが「みみず」を本当に強く刺激したから、と因果律的な発想で考えてみることも可能かも知れない。「官僚支配を打破してくれ」という祈りが結果させた政権が、逆に官僚支配の腐敗を徹底糾弾するという段階も経ることなく、官僚の手先のように「財政の健全化こそが喫緊の国家課題なのだ」と雄弁を振るう市民運動家上がりの首相を生むとは国民からすれば思ってもみなかったことだったのだ。

実際、今回の震災が巻き起こした根源的な災害である福島第一原子力発電所の問題でも、その後の報道で明らかになるのは、政治と資本と官僚の互いにもたれ合い〈ずるずる〉になった姿だった。原子力を推進する主体がそのまま原子力を監視し牽制するはずの機関に天下り、一線を画すべき民間企業にも子弟を送り込み、自らもその関係企業に天下り、研究者もまた研究資金のために民間企業である東京電力に不利な発言はまるでできない、という閉ざされた構造。メディアもまた川に落ちた瞬間にその犬を打ってみせるけれど、本当はその潤沢な広告宣伝費の恩恵に預からんがために、良心を売って加減ある報道に徹していただろうことを予想させる現実。

このように、たぶん存在するのだろう、と考えられていた「もたれ合いや腐敗の現実」が白日に晒されることで、こうした不健全さは糺されなければならない、糺すべきだ、という〈響きやふるえ〉はまたさらに倍加し

ていっくだろう。

また、関東大震災前夜もそうであったように、もっと深く複雑に絡み合い成熟した資本主義の資本増殖過程の中で、明らかに格差は発生し、その増殖の恩恵に属することができない層もまた増えている。彼らはもっと深い場所で、おそらくは先行したオウム真理教やアルカイダ等にもとても近い場所で、資本主義的な世界そのものを呪詛していることだろう。このシステムではない、もっと別のシステムを誰かが提示し、そこに導いてくれと願っていることだろう。国民国家の輪郭がもっと明確だった1920年代においては、その回答のひとつの形が全体主義でありことであった事は明白だ。しかし、〈帝国〉化された世界においてはもはや国民国家が最高の意思決定機関であり、権力形態であるという前提すら揺らいでいる。資本を軸としてグローバル化された世界の中で、そのような祈りを誰がどのような形で昇華させることができるのか、それこそが問われ始めている。

世界は変わるべきだ、変わらなければならない、いや、変えていかなければいけない、そのような自覚が、震災という事象を契機にこの震災を自分の震災として受け止めた人びとに生まれつつある。本稿で繰り返し述べているように、震災はそのようなものであり、だからこそ震災は歴史を画するのだろう。

## 4 | Give Capitalism a chance

さて、本稿も終わりに近づいた。第2章、第3章を使って筆者が伝えようとしたことは、わが国における大地震は、その時代の人々の無意識化の「世直し」の願いを受けて惹起したとその時代を生きた人びとは感じ、それを契機とした歴史過程がその後展開されたということ、阪神大震災・東日本大震災を貫通するその願いは表層的には「官僚支配打破」であり、深層的には資本主義がわれわれを従える現状のシステム、そのシステム自体の変革（国家体制の否定を含む）なのだということ、だった。

「えっ、そんなことを言っていたの？」と訝しがる読者もいると思うし、筆者もまた「あっ、俺、そんなこと言

っていたのか」と思う節がない訳ではない。まあ、でもテキストというのは、数式と異なりさまざまな解釈、読み解きが可能なものだと理解して欲しい。

### (1) 東日本大震災が抉り出したもの

さて、東日本大震災が抉り出したものの中で、表層的な部分であるが、阪神大震災の際にも同様の指摘を多くの論者にされて、相変わらずお粗末だったものは危機管理体制の脆さと、繋がりあうものはあるが、わが国のトップの頼りなさ、というものではなかったろうか。

東日本大震災から1ヵ月くらいの間の菅首相の対応・手際の拙劣さについては多くの報道や評論がそのあまりのひどさについてさまざまなエピソードを伝えているので今さら本稿で触れる必要もないだろう。自社さきがけ政権で村山政権を間近で眺め、教訓を得ていたという割には、初動で危機的状況にある福島原発の視察に赴いたり、さまざまな会議を乱立させ、危機対応の原則、情報と指揮系統の一元化とは全く別の状況を作り出したり、とそのドタバタぶりは歴史に名を残したいという彼の悲願の通り、間違いなく歴史に残っていくと思われる。

また、一方では民のトップ、財界の雄として君臨する大企業である東京電力トップの対応も拙劣だった。緊急時に会長は中国、社長は名古屋で適切な初動対応ができなかったのはある種の不可抗力の部分があるにせよ、その後、社長が倒れたり、彼らを支える副社長の対応がもうひとつ広報的にも良い印象の形成に成功していなかったり、とにかく東電はひどい、という印象がすぐに作られていったことは、このような企業でも危機的状況には耐えられないのだ、というわが国の限界・システムの限界を露呈して見せた。

実際、現場が優れていてトップが機能しないというのは、阪神大震災でも指摘された弱点だったし、太平洋戦争を見ても、もしかしたら203高地の戦闘を見ても、それこそ国民性なのかも知れないが、「フクシマ50」と呼称され、世界中の賞賛を浴びた現場と比べ、東京本社の雰囲気も対応もすべてが拙劣でどうしようもないと感じられた。誰も真剣には言及しないけれど、事故が発生し

しばらくしてから、東電を引っ張る会長、社長の風貌が明らかになった際、ああ、やっぱりこれか、と感じた国民は多かったのではないか。また、逆にそれはそのような風貌の人材しか、確立された・官僚化した大企業のトップには立てない(立ちにくい)システムがすでに確立しているという実態も明確にしている。

このようなシステムでは過去の経験を整理してマニュアルに従った判断を手際良く下せる学校秀才が、組織の中枢を占めるようになるし、一度システムが起動し動き出せば、むしろ能力ではなく家並みや毛並みの良い人材もまた、担がれる神輿・やんごとなき人材として組織の長になりやすくなる。一部有名大学出身役員がすでに体制として認知された有名大企業ではびこるゆえんだ。しかし、このような組織はどうしても前例を踏襲する官僚化された組織になりがちなので、突発的な事象の発生に対して機動力のある対応を取りにくくなるし、マニュアル化された世界に安住する社員が増殖することで、当たり前の判断というものすら自前で下せない小役人タイプの人材もまた跋扈することになる。

特に今回われわれが戦慄した報道は、予想されていて、隠されてはいたが、地震発生・津波発生の数時間後にはすでに危機的状況を迎えた東電が、自力での解決を放棄し、自衛隊に、国家にその処理を委ねたいと考えた、という報道で、そのような責任感の欠如をトップ企業がしているということに恐れを感じた人も多かったのではないだろうか。そして結局のところ、一部社員の健闘はあったにせよ、危機的状況を回避したのは、やはり自衛隊であり東京都の消防隊だったことは多くの人々の記憶に鮮明に焼付いた事象となった。

政府の発表も最初この事故が決してチェルノブイリのような深刻なものではなく、安全性についても心配は要らないというようなトーンのもので、一元化すらされないお粗末な開示が続いたが、それが太平洋戦争時の大本営の発表のようなもので、いずれ時間が経てばその初期段階からの悲惨さ・深刻さが浮き彫りになるだろうことは国民もほとんどが確信を持ってそう予想していた。そ

して実際、災害の重さのレベルはチェルノブイリ同様の7に訂正され、震災初期にすでに多くの識者が本音では予想しており、その空気を国民全体が感じていた通り、1号機も2号機、3号機も震災後ほどなくメルトダウンを起こしていた事実も明らかになった。

こうした情報の隠蔽（現時点ではあくまで一部の観測報道で浮かび上がる「その可能性の存在」）についても、避難区域の設定が後手に回ったことについても、その他、本件に関するあらゆる対応について、政治も主体者である東電も初動において機能しなかった、その事実は拭い難く歴史に残っていくだろう。阪神大震災の対応もひどかったが、今回の震災そしてフクシマの事故に対する対応は、それ以上にひどいもので、結局のところ、われわれのシステムはこのようなお粗末な指導者しか持ちえないシステムに墮してしまったのだと理解する他はない。

## （2）外から来るものに対する弱さ・脆さ

東日本大震災は、このような危機に対応した場合のシステムの不全についても、「世直し」が必要であることを、警鐘を鳴らし示して見せた事象だったとも考えられる。

資本のグローバルな運動の展開の中で、それでもわが国は巧くその流れに適合し、世界経済の価値連鎖の中に重要な地位を占める独特のポジションを太平洋戦争後に（もしかしたら明治維新からの連続性も含め）確立してきた。それは逆に今回の震災を受けて、とりあえず円相場が逆に円高に振れた事象や、世界経済におけるサプライチェーンの分断という形で現実、たとえばアメリカの自動車生産が滞る等の形で、明白にしてみせたが、そのような日常のシステムの円滑さ、資本増殖回路の無駄のない運動そのものが、大地震のように資本増殖回路の外側から来る事象に対し、極めて脆い構造を持っていることの裏返しでもあるだろう。

また、世界経済の主要な一員、＜帝国＞の重要な構成メンバーとして、すでに＜帝国＞に適合し、国家も社会も＜帝国＞に融合しているがゆえに、突発的な事象への対応能力を劣化させてしまった、それが2011年の日本の姿である・姿だったと考える視角もあるはずだ。

そのような視角から皮肉に考えれば、だからこそ今回のフクシマのようなく帝国＞そのものの基盤を掘り崩す可能性を持つ事象に対しては、たとえばアメリカやたとえばフランスこそが、その＜帝国＞の危機に素早く対応する主体・頭脳になりえるのであり、結局は米軍や国家としてのフランスと密接な関係を持つアレバ社が事態収拾に本腰を入れて乗り出した頃から、なんとなく危機的な事態が収束に向かったのではないか。

さらに思考を極端に振れば、東電が恥の外間もなく政府にその収拾を依頼しようとしたように、国家としての日本も恥も外間もなく駐留する米軍やホワイトハウスに、その収拾を迅速に委ねるという発想すら成立しうるだろう。

もちろん、そこにはさすがに躊躇があるし、逆に＜帝国＞はなお国民国家とそれぞれの国民国家を母国とする巨大企業の連合体のようなものなので、そこでは東電や東芝、日立、三菱重工業といった原子力産業の利益を考え、とりあえず自分たちでやれるのであれば、自分たちで収拾にあたる、そう菅政権も考えたからこそ、報道であるようなアメリカの事故発生直後からのさまざまな申し出を断ってみせたのだと、そこも理解できる話だ。

さらに言えば、東芝は当然、ウェスチングハウスをその傘下に収めているし、日立にせよ、三菱重工業にせよ、国際的な意味で連携し相互に融通しあっているアメリカやフランスの企業と、原子力産業を守る、というまさにその利害から、フクシマの収束に向けたさまざまな打ち手の検討をそれぞれの陣営が、他の陣営とも協調しながら始めていった・始めている、のが現在のフクシマの状況ではないだろうか。

## （3）営利企業だからこそ必要な「信頼」

第1章で示したように、仮に東電の官僚化の問題が実は独占の弊害の問題であったと考えるのであれば、フクシマを本気になって早期に収束させたいと考えるその信頼できる主体は、政権の延命やそのための人気取りに汲々とする政治家でも、天下り先の確保や組織の維持を第一命題と考える官庁組織でもなく、東芝や日立等原子力産業を構成する巨大私企業になるだろう。しかも、そ



の組織こそ、本当の意味での知識やノウハウが蓄積されている組織となる。

であるならば、むしろ重要なのは、営利を目的とする株式会社を信頼し、果断なる処理を彼らに委ねるという姿勢・発想ではないだろうか。問題は営利の源泉をどう考えるかであり、長期的なスパンで営利を確保するためには、どうしても「信頼」が必要であり、逆にだからこそ安全性を確保した仕事を彼らは考えるだろうと信ずること、そこから未来を構想するしか道はないのではないか、と思う。

世界経済は巨大な生産力を20世紀後半以降有するようになったが、その機構が機能するための分業の状態は、とてもアダム・スミスが想像したような範囲のものではなく、複雑に多様化され細分化・専門化されていった。そのような社会の中で、民主主義的な政府が果断に迅速に意思決定をしていくのは、本当に難しい作業にならざるを得ない。マイケル・サンデル等コミュニタリアンの影響もあって「熟議」という用語が最近流行しているが、確かに民主主義的過程の中で「熟議」は必要な過程ではあるが、突発的な危機対応を迫られるような時には、とてもそのような議論の時間は許されない。さらに問題なのは、社会的な正義というようなそれぞれの価値判断や思想に依拠する軸で行われる議論は、必ずしも最適な妥協点を生むかどうか分からない点だ。

むしろそれよりは、価格というシグナルを有し、利潤を獲得するというひとつの正義ですべての運動が律せられる資本主義の体制、株式会社の体制に、それぞれの分権化された領域での意思決定を委ねていった方が、ずっとずっと移り変わる環境への適応は速やかにされるに違いない。

もちろん、柄谷行人が喝破するように国家と資本そしてネーションは三位一体構造を有していて、いかに<帝国>こそが現実という世界となっても、資本がその前提に置かなければならない私有財産制度の維持等の領域で、国家そのものを否定し資本だけが存在する世界の構想等描くことはできない。

その前提に立てば、三位一体構造を超えた倫理ある個人が自発的に形成するアソシエーションというような構想、まさに柄谷が主導したNAM<sup>4</sup>のような構想や地域通貨を中心におく連帯の構想も成立しなくはないだろう。しかし、私の1時間の労働と彼の1時間の労働のその価値がどのようにして等価であるのか、その軸が揺らいでしまえば、こうした議論は顔の見える共同体・仲間の議論としては成立しても、顔すら見えない他者を連携・連帯させる力はそこには存在しないだろう。

その意味では、結局は自生してしまったこの巨大なグローバル体制は矛盾も問題も抱え込んでいるとはいえ、市場＝価格機構を中心に据えて、奇跡のように何十億の他者を結びつけ、相互にその労働をそれぞれの人生のなにがしかの価値に、少なくとも貨幣交換を誘うだけの価値に、変換させるための回路として現実ここに存在している。

とすれば、この現実を自分たちに敵対するものとしてとらえ、サリンを撒いたり、自爆覚悟でビルに乗っ取った航空機をぶつけてみせたりすることではなく、むしろこの現実を肯定し解釈し直し、逆に自分たちのための機構として乗っ取ってみせる方が、構想の妥当性は高いのではないか。つまりは、資本主義にもう一度チャンスを与えることの方が、ずっと戦略として妥当性が高いのではないか。

#### (4) 資本主義的人間としての同質性 世界市民、<帝国>の住人、の誕生

また、経済のグローバル化がもたらしたわれわれ自身の意識の変化も見逃せはしない。

もし仮に資本主義を是正しようと考えた場合、たとえば、そのひとつの戦略は三位一体構造の他の2つの柱を軸とした世界を構想する、という方法になる。関東大震災があった1920年代においては、その方法が結局は選択され、国家や民族を中心にした世界が新しい世界として提示された。

しかし、1945年以降、特に1970年代以降のグローバル化の進展は、1989年・1991年の東側世界の西側

への吸収という象徴的な事象を加速点として急激に進み、国民国家を国民国家として成立させた文化の同一性という部分でも、逆に歴史や伝統にではなく商品として消費される文化、ハリウッド映画やさまざまなポピュラーミュージック、日本のマンガやアニメーション、韓国のテレビドラマ、そしてサッカーや野球、オリンピック等のスポーツこそが、自分自身が何者かを考える上で決定的な文化であるとする。膨大な国籍の（ある意味）ない人々を群生させている。ビートルズを聴き、コカコーラを飲み、マクドナルドでハンバーガーを、スターバックスでコーヒーを、そして寿司を食べ、ユニクロやギャップを着る人々、そのような意味での同質性について、われわれは深く考察すべきではないだろうか。

<帝国>が存在する以上、<帝国>の住人もまた存在する。

それは当たり前の話だろう。<帝国>が実体なく浮遊しているのであれば、その住人もまた大地から、それぞれの国土に、祖霊の眠る国土から浮遊して存在しているはずだ。また、消費の部分だけで<帝国>の住人を語るのも間違いで、国境の存在によって巧妙に賃金格差は存在するとはいえ、日本でもインドでも、全く同じ動作を全く同じラインで毎日繰り返す工場労働者も存在しているはずだろう。思考が身体から離れては存在しないのであれば、長い年月を同じような工場の風景の中にいて同じ作業を繰り返すその2人の感受性もまた、人種や民族の違いを超えて同じ傾向を持つに違いない。

とすれば、むしろこのシステムに対峙するうえでわれわれが考えるべきは、国民国家の再生、ナショナルなもの再生、ではなく、気恥ずかしい言い方にはなるが、世界市民としてのトランスナショナルな連帯ではないだろうか。

#### (5) サッカーを通じた連帯 あるいはトモダチが支えてくれるひとりじゃない世界

世界市民の連帯という意味では、阪神大震災の当時の光景と異なる光景が今回の東日本大震災では展開された。それは繰り返されたACジャパンのコマーシャル・フィル

ムであったり、スポーツニュースであったりしたのだが、そこではインテルの長友佑都や、ドイツ、シャルケの内田篤人が、日本はひとつというメッセージを繰り返し話していた。しかし重要なのは、その背景でイタリアやドイツの観衆もまた「がんばれ日本」というメッセージを熱い声援で送り続けてくれたことにこそある。

Jリーグが開幕したのは1993年、阪神大震災の2年前になるが、そこからフランスW杯への参加、日韓共同開催、ドイツW杯、そしてベスト16に宿主国ではなく入った南アフリカW杯、その4つのW杯を経験し、Jリーグ人気こそ開幕当初から比べ多少萎んだとはいえ、サッカーは十分に（むしろ地域スポーツとしては当初の狙い以上に）日本に根付き、その土壌の中で、数多くの世界に通じるサッカー選手が欧州に進出していった。それはまた野球を通じたアメリカという窓を通じたグローバル化とはまた別の、本当の意味でのグローバル化と平仄を合わせている。

米軍が今回の震災援助で展開した作戦の名前が「トモダチ作戦」であったことは有名だが、資本や政治という<帝国>の上層、国際官僚・国際資本の差し伸べた支援の手、以上に、主には労働者階級が集うサッカースタジアムのような場所から送られたトモダチとしての連帯の感情こそ、われわれがわれわれの明日を構想するうえで重要ではないか、と思う。

レディ・ガガが親日家であり、震災被災者への義援金を募ったことも有名な話だが、そのような形でもわれわれは確かに世界とトモダチとして直接につながりつつある。世界市民的連帯の萌芽が確実に芽生えている。東日本大震災はその事実もまたわれわれに気付かせてくれたのではないだろうか。そして仮にその世界市民的意識が閉鎖性を持つ国民としての意識に優越するのであれば、連帯すべきは国民としての同胞ではなく、<帝国>の住人、世界市民としての同胞であり、もしかしたらシステムの中でより同質の感受性を育んだ、たとえば工場労働者としての同胞であったりするのではないだろうか。

理想を言えば、その連帯の在り方が政治性を帯びてい

の方が「世直し」の文脈からは正しいと言えるだろう。しかし、その試みは「万国の労働者よ、団結せよ」というあの叫びから一歩も離れていない試みにしかならない。

それよりはむしろ、たとえばお互いにサッカーを愛するという共通項で、まずはつながっていくことで現実性を帯びた連帯の萌芽を生み出すことができるのではないかと、と思う。

さらに言えば、資本主義を駆動させることによって得られる「豊かさ」の中では、実は虐げられ格差に悩む社会的弱者、たとえばフリーター、たとえば派遣労働者等、プレカリアートと総称される層こそが、社畜となって経済に従事し経済的には豊かであってもその豊かさを活用する時間を持たない層よりも、より公的な意味での政治を語れる可能性を持つ、その認識が決定的に重要ではないかと思う。

アーレント<sup>5</sup>が理想としたギリシアの民主主義は、経済はあくまで家計の問題、私的領域の問題であり、卑しい経済を離れて「人間として」語り合うべき理想を公的な場・公共空間で議論を通じ、秩序付けていくことこそ重要だった。

その意味では、経済は奴隷たちの仕事であり、貴族は労働から離れ、学問やスポーツ、芸術に自らの人生の価値を見出しながら、公的な領域を形成し、政治を行うという役割分担が確立もしていた。これを逆に考えれば、実は経済的な格差があったとしても、むしろ人間としてよりギリシアの貴族のような人生を送れる可能性を持つのは、プレカリアートなのだ、という解釈さえ成立するだろう。

だから、一歩だけ踏み込んで言えば、経済に隷属せず公的な領域を形成しえる資格を最も有する層は、実はプレカリアートなのだ、という解釈すら成立するのではないだろうか。もちろんそれはプレカリアートだけではなく、この世界が自分の世界ではないと感じ、世界を変えたいと願うすべての人々にそのチャンスは与えられている話だ。

システムに盲目的に埋没せず、高度経済成長期の日本

のサラリーマンのように、勤めている企業を疑似共同体に置き換え、そこに隷属するということから自由になり、システムをむしろ自らが自らの人生に利用すべき機構と突き放して考える立ち位置を得たすべての<帝国>の住人にそのチャンスは与えられている。

会社という組織・共同体にがんじがらめに縛りつけられた社畜ではなく、もっと自由でありうる彼らこそが、たとえば身近なコミュニティの再生という公共空間の再生主体になりうるはずなのだ。それは、地域の少年野球団の運営でもサッカー愛好会の結成でも構わない。経済とは別の人間としての世界創造、それはやはり精神的貴族の仕事なのに違いない。

#### (6) 弱者のための国家と世界を救うための言葉

そして、もしもこのような解釈に魅力を感じるのであれば、資本主義機構が持つ巨大な分業のシステム、巨大な生産力、「豊かさ」の源泉を否定したり破壊したりする必要はない事にも気付くのではないだろうか。

さらに言えば柄谷行人が抉り出したように、現状ではそのシステムにむしろ隷属する国家機構、その国家もまた否定も破壊も必要なく、ただ単に乗っ取って巧く利用すべき対象なのだと思わなければならない。

小泉純一郎の権力の源泉は2005年9月の郵政民営化を争点とした衆院選挙の圧勝であり、鳩山が本格的な民主党内閣を実現しえた理由も、2009年8月の衆院選挙の圧勝だったが、それは40%とも50%とも言われる無党派層、おそらくはシステムの中で必ずしもそこでの自分に満足しておらず、<響きやふるえ>の主体となり世の中の変革を祈っている層が、その変革を願ってその1票を小泉に鳩山に投じたことがこの変革を生んだのだと考えられる。

同様にお笑い芸人であった東国原英夫氏やタレント弁護士であった橋下徹氏を知事という形で政治の場に送り出したのも、この層であったと考えられるだろう。

最初の段階では、政党ではなく触媒になりうるカリスマ的個人がとりあえずは必要なのだろうし、その意味では首相公選のような構想が実現した場合、もっと直接的

な回路が開かれる可能性があるが、自分が孤独で世の中から切り離されていると感じている、このシステムの中で成功してはいない、何のために生きているか分からない『かえるくん、東京を救う』の片桐たちは、まずは自分たちの持つ現実的な政治上の力に目覚めるべきではないか。シンボリック・マネージャーのように、あるいは多国籍企業の社員のように、直接に資本主義につながりその恩恵を受けられる層のために、ではなく、実は弱者のためにこそ、国家は存在している。その国家を使って資本主義を擁護し、十分な豊かさの実現と、たとえばベーシックインカムのような形でのその豊かさの分配を勝ち得ることも、可能なのだから。

さて、最後に村上春樹の『かえるくん、東京を救う』に戻ろう。あくまでも個人的な考察にはなるのだが、そもそも、蛙はなぜ片桐を選んだのか、という片桐自身が訝った理由についての仮説を提示したい。

「みみず」が居た場所が片桐の勤める東京安全信用金庫の地下だった理由もそこにあるのだろうと思うが、そのひとつの解釈は、「なぜ生きているのか分からない」と嘆

く片桐こそが（無意識の裡にではあっても）他でもない<響きやふるえ>を「みみず」に与えたそのひとりであり、実は憑代（よりしろ）としてすべての片桐のような人々の<響きやふるえ>をも集めて「みみず」を起こしてしまった張本人だった、のではないか、というのがその仮説である。

崇るものこそが守り神になる、というわが国の霊的な構造からすれば、「みみず」を呼び起こしてしまった片桐こそが、その「みみず」を封じ込めるうえでの切り札にもなりうる訳で、蛙と片桐の「みみず」との死闘は「みみず」封じのための鎮魂の儀式だったのではないだろうか。

「あなたのような人にしか東京は救えないのです。そしてあなたのような人のためにぼくは東京を救おうとしているのです」（『神の子どもたちはみな踊る』p.171）

<響きやふるえ>の主体はこのシステムの中で報われているという感情を持たず、この世界の変革を無意識下に願う、もしかしたら私やあなた、なのだと思うが、東京を世界と置き換えたうえで、そんな私やあなたに向けられている、この蛙のセリフをもって本稿を終えたい。

#### 【注】

- <sup>1</sup> 柏原竜二（かしわばら りゅうじ、1989年7月13日～）。福島県いわき市出身の陸上競技選手。東洋大学経済学部在学。箱根駅伝往路5区の上山りにて「区間賞」を連続で受賞する等、驚異的なスピードを誇る。
- <sup>2</sup> コーネリアス・ヴァンダービルト（Cornelius Vanderbilt, 1794年5月27日～1877年1月4日）。アメリカの実業家。「鉄道王」として知られる。
- <sup>3</sup> 神泉苑（しんせんえん）。京都市中京区に立地する東寺真言宗の寺院。
- <sup>4</sup> NAM（New Associationist Movement）。思想家の柄谷行人（からたに こうじん）が、「国家と資本への対抗運動」の場として、2000年6月に立ち上げた組織。同年、『NAM原理』（太田出版）を発行。MAMには、著名なエコロジー活動家など、多数が参加したが、2003年1月に解散。
- <sup>5</sup> ハンナ・アーレント（Hannah Arendt, 1906年10月14日～1975年12月4日）。ドイツ出身の政治思想家。主な著書に『人間の条件』等。

#### 【主な参考文献】

- ・丸谷才一『忠臣蔵とは何か』1984 講談社
- ・村上春樹『神の子どもたちはみな踊る』2000 新潮社
- ・大澤真幸『虚構の時代の果て』1996 筑摩書房
- ・伊藤之雄『政党政治と天皇』2002 講談社
- ・有馬 学『帝国の昭和』2002 講談社
- ・河野康子『戦後と高度成長の終焉』2002 講談社
- ・今井清一『日本の歴史23 大正デモクラシー』1974 中公文庫
- ・井上寿一『山県有朋と明治国家』2010 NHK出版
- ・柄谷行人『世界史の構造』2010 岩波書店
- ・柄谷行人『世界共和国へ』2006 岩波新書
- ・佐伯啓思『貨幣・欲望・資本主義』2000 新書館
- ・アントニオ・ネグリ、マイケル・ハート（水島一憲ほか訳）『<帝国>』2003 以文社